

南面回廊基壇高の検討

— 第一次大極殿院の復原研究 9 —

はじめに 奈良文化財研究所では、近年まで平城宮第一次大極殿院地区の発掘調査を断続的にこない、第117次調査までの成果を『平城報告X I』(1982)、第389次調査までの成果を『平城報告X VII』(2011)にまとめた。その後も第431次以降の調査をこない、各調査で新たな成果を得ている。そして第438次調査(2008年度)をもって、長大な築地回廊(Ⅰ-2期の心々距離:東西約177m×南北約318m)の発掘調査をほぼ終えたことで、遺構を総合して検討できる段階となった。2010年度以降は、これを受けて回廊の復原検討をおこなっている。本稿では、このうち南面築地回廊(東半SC5600、西半SC7820、以下南面回廊とする)、および南面回廊と一連の基壇をもつ東西楼(東楼SB7802、西楼SB18500)の基壇高の検討(第39回、第41回検討会)の成果を報告する。

遺構と既往復原案 南面回廊および東西楼の基壇について

では、断片的にその痕跡および遺物を確認している。基壇高に関わる主な遺構は、側柱の礎石、および基壇外装の痕跡である。基壇外装の痕跡はごく一部の検出に留まるが、礎石の痕跡は比較的遺存状況が良く、側柱想定位置70カ所のうち34カ所で礎石据付穴、根石、抜取穴を検出している。2011年度には、これらの南面回廊の礎石の痕跡をもとに、第一次大極殿院の基準尺0.2949m/尺を算出した(『紀要2012』)。

過去には、『平城報告X I』および1/100模型(『年報1994』)において、南面回廊および東西楼の基壇高を2尺程度、基壇上面を水平とする復原案が示された。2002年度には、東楼の西端から緩やかに基壇上面がすり上がり、南門の基壇上面に取り付く復原案が示された(『紀要2003』)。いずれも、当時の発掘成果が大極殿院の東半のみであったため、南面回廊の検討も東半の遺構にもとづく。そこで今回は、第431次以降の調査成果をふまえ、南面回廊全体の遺構について再検討した。

南面回廊東半および東楼部では、原位置を留めるとみ

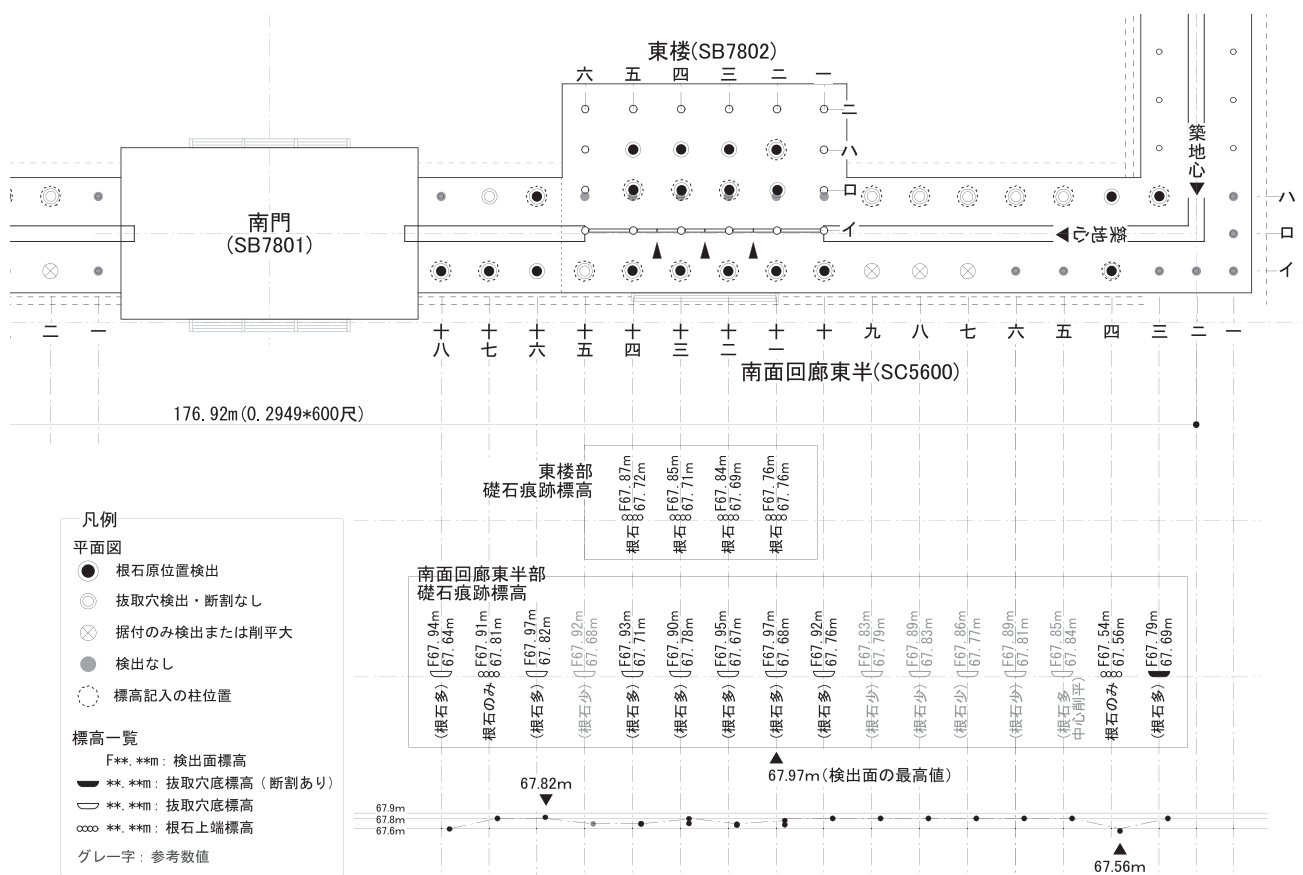


表6 礎石痕跡の標高と葛石上面の標高

	礎石痕跡の標高 (b)	想定礎石厚 (t)	礎石上面標高 (h = b + t)	葛石上面の標高 H = h - 0.11	h から想定する 礎石厚の最小値 (t 小 = h - 67. 97)	h から想定する 礎石厚の最大値 (t 大 = h - 67. 56)	評価
① 最大値	68. 82 SC5600イー十八 南門際抜取穴底	0. 52 0. 47	68. 34 68. 29	68. 23 68. 18	0. 37 0. 32	0. 78 0. 73	t 大が大きい 許容できる
② 平均値	67. 71	0. 50 平均値	68. 21	68. 10	0. 24	0. 65	t 小が小さすぎる
③ 最小値	67. 56 SC5600イー四 南面回廊東端根石上面	0. 52 0. 47	68. 08 68. 03	67. 97 67. 92	0. 11 0. 06	0. 52 0. 47	t 小が小さすぎる

【備考】単位：m、礎石上面から葛石上面の標高差0.11m（礎石見付け高さと水勾配の想定による）、南面回廊の検出面標高の最高値：67.97m、礎石痕跡標高の最低値：67.56m

られる根石を多く検出している。根石は、礎石底または礎石側面に沿うように中心部を低くし、碗状に径5～10cmの玉石を密に敷いたものである。南面回廊の礎石想定位置のうち、根石が原位置を留めるのは、東半の側柱想定位置35カ所のうち7カ所、東楼部の8カ所すべてである。一方、南面回廊西半および西楼部では、礎石抜取穴および据付穴を検出している。根石は一部の抜取穴内にまばらに残るのみである。また、抜取穴等の検出面の標高も東半に比べて10～20cm低いいため、東半よりも大きく削平された可能性が高い。

礎石の痕跡の標高は、極端に抜取穴が深い西樓部を除き、最小値67.56m（表6①、南面回廊の東端）、最大値67.82m（表6③、南門際）、平均値は67.71m（表6②）である。南門際で最大値をとるものの、34ヵ所の痕跡の標高の分布をみると、南門際の標高が特に高いわけではなく、南門から東西へ下る傾向もみられない（図63）。

また、西樓の側柱抜取穴から、回廊または西樓所用とみられる礎石 2 点が出土している（第337次調査西樓ハ－六出土：厚0.47m、西樓イ－六出土：厚0.52m、『紀要2003』）。

基壇上面の標高 先に述べたように、礎石の痕跡の標高には、南門際が高い傾向がみられないため、南面回廊基壇は、東西楼・南門際を含めて基本的に水平であった可能性が高い。また、礎石の痕跡の標高にばらつきがあることから、礎石の厚みにもばらつきがあったと考える。これを前提とし、基壇上面の標高を検討する。

基壇の上面の水勾配を考慮し、「基壇上面」は基壇葛石の上面とする。通常、この標高は礎石上面の標高よりある程度低く、基壇上での礎石上部の見付高0.09m（回廊の類例による、第39回）、および水勾配1%を見込んだ標高が想定できる。この想定から、葛石上面の標高は、礎石上面の標高から0.11mを引いた標高とする（図64）。

つづいて、礎石上面の標高を求める。ここでは、礎石痕跡標高（最低値・平均値・最高値）と、西楼出土の礎石厚（0.47m・0.52m・平均値）を組合せ、南面回廊検出面の標高最高値（67.97m）と礎石痕跡標高の最小値（67.56m）をそれぞれ引いて得る値、つまり想定する礎石厚が妥当

な大きさとなるかを判定した(表6)。回廊の類例によると、礎石厚の最小値は0.3m(藤原宮大極殿院回廊出土の最小礎石)、最大値は0.6m(藤原宮大極殿院回廊出土の最大礎石)である。想定する礎石厚みが、比較的類例と近い値をとるのは、礎石痕跡の標高の最大値に出土礎石厚0.47mを加えた、礎石上面の標高68.29mのとき(表6の下段)である。他の場合は、0.06~0.24mと非常に薄い礎石、または0.78mと非常に厚い礎石を想定することになり、不適当である。そのため、礎石上面の標高は68.29mを妥当と考える。葛石上面の標高は、礎石上面の標高68.29mから、0.11mを差し引いた68.18mである。

基壇高は、葛石上面の標高と南面回廊基壇際のGLの差である(図64)。高橋による検討(40~41頁)より基壇際の標高は67.66~67.95mとなるから、葛石上面の標高68.18mからこれを差し引くと、0.25m(0.8尺)~0.52m(1.8尺)となる。

おわりに 今回の検討で得た南面回廊葛石上面の標高68.18mに、地形および基壇の仕様を加味して各所の基壇高を決定する。また、大極殿院全体は南に下る地形であることから、特に回廊外側の地形と基壇の関係を解明することが今後の課題である。(井上麻香)

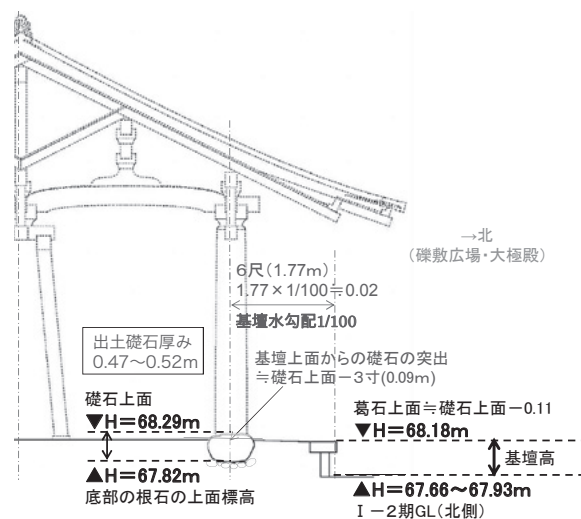


图64 南面回廊北側基壇断面模式图